

コラム:10 父の死

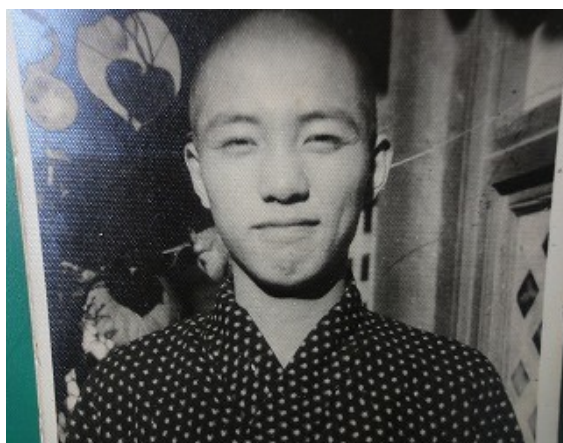
去る3月28日、私の父が他界しました。享年89歳、大正12年3月11日生まれです。通夜は29日、葬儀は30日に執り行い、無事に終えることができました。



父は大変元気な人で「ワシは100まで生きるんじゃ」と、よく言っておりました。実際それまでの長い人生で、1度も病院に入院したことがなく、健康診断でも全く悪いところはなく、健康な体と強運に恵まれた人でした。ところが、4年前に脳梗塞で倒れ、4か月で退院したものの、翌年の1月、今度は脳溢血で再び倒れ、その後1度も退院することなく、約3年と2か月余り、大変つらい闘病生活をしておりました。

入院生活の間は、父は体の自由を全く失い、左手と左足が少しでも動かせるのみで、言葉を発することも出来ませんでした。食べるという行為も、胃に穴をあけて流動食を注入するという状態でした。「動く、話す、食べる」という人間の一番基本的な生命活動をすべて奪われ、ただベッドに横たわっている父を見ることは、側にいる私たちにとっても辛いことでしたが、誰よりも父にとって、辛く苦しい時間であった、と思います。

この3月22日夜、脳出血後遺症による肺炎をおこし、3月28日夕刻に息を引き取りました。母と私と妹そして父の唯一の兄弟である叔母(姉)の4人が、父の最後を、看取ってやることができました。立ち合いの医師が「6時15分です」と言った時、思わず私は「え？死んだんですか」と問い返しました。傍らにいる私たちが気が付かないほど、静かに安らかに、父は自らの人生を終えたのです。父は人生の最後に何を想ったのか—私は生まれて初めて、人間の生の最後の姿を見守りました。



父は家庭の事情から、教育をあまり受けることなく、少年時代から丁稚奉公のごとく社会で働き、

戦前は親戚の縁があって、中国で仕事をしていたようです。戦時下においては、関東軍と当時呼ばれた中国東北部に駐留していた軍隊に所属しておりました。兵士として非常に優秀であったようで、戦時下に行われた「国体」に華北代表として出場した時の、写真が残っております。その後、選抜されて、天皇直属の兵である近衛兵となって東京に移り、そこで終戦を迎えました。それは戦中派世代の常として、厳しく苦しい、懐かしい父の青春の時代であった、と思います。当時を振り返り、よく言っておりました。「わしは運がえかったんよ。あのまま中国におったら、どうなったかわからんけえのう」。



戦後はいくつかの職を経た後、地元の銀行本店に運転手として30年勤務しました。飲みに行くでもなく、旅行に行くでもなく、若いころから働きづめで、あまり「遊び」ということをしない人でした。父が会社人生の中で、唯一見つけた自分の「道楽」が洋ラン栽培でした。在職中から小さいハウスを建て、洋ランクラブに入り、趣味で多種類のランを作っておりました。

55歳で定年退職後は、退職金を投じて220坪の鉄骨ハウスをつくり、25年間シンビジュームを中心とした洋ラン栽培に取り組みました。当時は生産者も少なく、バブルの時代もありましたので、商品の実力以上の相場もあり、それなりの「もうけ」もあったようです。父は、それまでの軍隊生活や厳しい会社生活を埋め合わせるかのように、自分のやりたいことをやり、特に定年後に充実した生活をしたように思います。



仕事そして兵士として、中国大陸を渡り歩き、東京で空襲と焼跡を体験し、その後は長い会社生活と、花のハウス栽培—という波乱にとんだ父の人生。人は一人で生きているわけでないゆえ、戦友、仕事の仲間、生産者関係、あるいは親戚、近所など、多くの方々に、お世話になり、父は自分の人生を終えたのだ、と思います。あとに残された私たち家族も、父とともに生き、ともに喜び、沢山の「思い出」を残しました。



祭壇に飾られた父の遺影は、にっこりと実にいい顔で微笑んでいます。12年前に少し若かった頃、家族そろって撮った写真です。「いい人生じゃったよ。みんなありがとうの」と言っているようです。父はあまり信仰心はない人でしたが、向こうの世界に行っても、大股で歩きまわっているに違いありません。私は、そんな「元気なオヤジ」の姿しか思い浮かばないのです。

「死んだら、鬼が自由にしようの」(父の口癖でした)
(' 12・4・5)